

## 論文の内容の要旨

論文題目 韓国柱心包斗論－表現論理の解説－

氏名 崔(チェ) ゴウン

本研究は、韓国の寺院建築を対象に、古代から伝統的に受け継がれてきた斗拱形式である柱心包に焦点を当て、その表現論理について解説を試みた。これは、従来、形式分類の枠から抜け出せずにいた韓国の斗拱研究から一步踏み出した研究として位置つけられる。斗拱を単なる様式あるいは形式ではなく、建物における斗拱そのものの意味について考察する。

### 1. 研究の目的と意義

本研究の目的は以下の通りである。

- ① 韓国の寺院建築を中心に、その斗拱表現原理について探り、それらを日本寺院建築における斗拱表現の手法を比較することで、韓国と日本建築における共通点と相違点を見出す
- ② 12世紀以後、中国建築の要素がどのように韓国と日本寺院建築の柱心包に影響を与えたのかを比較し、中国建築に対する韓国と日本の受容態度を明らかにする。
- ③ これらを通じて、最終的には東アジアという大きな枠の中で、韓国柱心包の特徴を捉え直す足がかりにすることを目的とする。

この斗拱の比較作業を通じて見出された共通点は、韓国と日本建築の同一性を示唆し、相違点、両国建築における独自性あるいは個性を意味する。そしてこの相違点を導き出すことにより、本研究の最終目的である韓国柱心包の特徴をようやく述べる事が可能となる。さらに韓国建築の特徴を明確にすることは、韓国建築史における12世紀以前の建築空白期を埋める上で、多少なりとも役立つことに繋がる。

こうした研究は、従来各国で単独に行われていた建築史研究からさらに一步進んだ研究であり、東アジアという大きな視点から建築を捉えるという点に大きな意義がある。また文化財の保存に関する関心が高まる今日において、その価値付けにおける学術的な根拠としても活用できる資料となる。

## 2. 論文の内容

本研究は大きく2部、それぞれ3章に分けて構成される。

第1部は、韓国の柱心包論で、柱心包斗拱に関してどのような意味付けが可能で、どのような解釈が出来るのかに焦点を当て、その表現論理を探る。

### 第1章. 解読の新たな枠組み

まず従来柱心包の枠組みには入らなかった出先のある翼工を研究対象に含め、新たな柱心包分類の枠を設定した。柱心包を一つの変化の過程として捉えた上で、A・B・Cタイプに分け、その展開を述べた。Aタイプは大斗の上から斗拱が組まれている柱心包で、さらに多包の影響が入る前の段階とその後とで区分した。そして多包が移入される前のAタイプを、最も柱心包の古い形式として捉える。Bタイプは挿肘木を大きな特徴要素として用いている柱心包で、13世紀～15世紀にかけて柱心包の主流となる。Cタイプは、従来翼工として捉えられていたもので、16世紀以後、Bタイプから変化を遂げた柱心包と捉える。このCタイプは17世紀以後、柱心包の主流を成す。

### 第2章. 表現論理の抽出

ここでは、第1章の分類をもとに、柱心包斗拱が持つ意味について考察し、その中から斗拱の表現原理あるいは形式論理を探った。そして柱心包の斗拱表現から以下のことを読み取ることができた。

- ① 建物の屋根の形と斗拱の手先数と形態から、建築の格式を読み取れる。
- ② 斗拱の組み方、特殊な肘木の形態などから、造営に携わった工匠の関連性を伺うことができ、柱心包の系統を推測することができる。
- ③ 外部の斗拱表現と内部の斗拱表現から、建物の外部と内部を区分する手法として斗拱を用いていることが判る。
- ④ 肘木の形態の変遷に注目することで、そこから木造建築の建立年代を推測することができる。

そして以上の斗拱表現から、外部では屋根の形に関係なく、「軒下における斗拱表現は統一する」という一定の論理と、内部では「内部の斗拱表現はボアジをもって表現する」という原則を抽出することができた。

### 第3章. 表現論理の逸脱

一方、ある形式が定着すると、今度はその定型を乗り越えようとする意識が芽生えてくる。これは斗拱表現論理においても全く同様で、表現論理の逸脱と言える斗拱

表現が 17 世紀以後、建物の軒下において著しく見られた。従来の論理では、「軒下が見える部分の斗拱形式は同じように統一する」という原則があった。しかし 17 世紀になると、我々が一つの建物を見る際、「最も視覚が集まる頻度の高い部分に意匠を集中させる」という論理が発生し、結果的に建物の正面を強調するようになる。要するにあまり目の届くことのない両側面や後面の意匠には手の込んだ仕事を省く。

第 2 部は、第 1 部で行った韓国柱心包の解釈をもとに、それらを日本の和様でみられる斗拱表現と比較する。比較を通じて両国建築における斗拱表現の共通点と相違点を明らし、韓国建築における斗拱の特徴を浮上させることを目的とする。これは日本中世寺院本堂における斗拱の表現手法の特徴も鮮明に描き出すことにも繋がる。また第 2 部では、12 世紀～16 世紀の斗拱を比較することで、中国建築に対する韓国と日本の受容態度を探る。これらの比較は、中国の建築技術から導入された柱心包が、どのように韓国と日本の建築界で解釈され、自分たちの形式として確立して行ったのかを物語ることになる。

### 第 1 章. 表現手法の比較

柱心包の表現手法に関して、韓国と日本の寺院建築を比較する。

その結果、建築意匠において両国とも共通的に、外部における斗拱表現と内部における斗拱表現を明らかに別々の表情とし、それを上手に建物の空間を区分する上で有効な手段として活用している。また「軒下の斗拱は同じ表現をもって統一する」という外部表現論理が見られることも共通している。しかし、興味深いことに、それらを表わす手法は、両国において異なる。この両国の差こそ、韓国と日本建築における斗拱表現の独自性であろう。

### 第 2 章. 新様式移入と表現論理

新様式の斗拱表現は、韓国・日本ともに従来の斗拱表現に与えた影響はごく部分的なものであったが、その影響が現れている部分に注目すると、両者の違いははっきりして来る。

韓国においては、多包の斗拱表現は外部・内部の斗拱表現に朝鮮時代初期の早い段階で見られものの、17 世紀以後になってから多く用いられる。しかし、17 世紀以後においても、従来の柱心包の斗拱表現を強く意識した表現となっている。

一方、日本の場合、新様式の影響は、外部表現においては斗拱表現自体の影響はなく、中備えに双斗が用いられたぐらいである。しかし内部表現においては、外陣と内

陣を持つ内部空間の性格から、それらを区分する上で、大仏様の皿斗や禪宗様の拳鼻を採り入れている。つまり外陣と内陣の境目にある斗拱は、その表側に当たる外陣を強調する場合と裏側に当たる内陣を強調する場合とで、従来の斗拱表現に新たな要素を加え、より明確に区分する上で有効に採り入れている。

このように、中国の新様式に対する韓国と日本の受容態度は、両国ともに従来の柱心包論理を崩すことなく、必要な部分だけを採り入れている。

### 第3章. 表現要素の固有性：挿肘木

韓国柱心包の特徴として取り上げられる挿肘木部材に焦点を当て、中国や日本で見られる挿肘木と比較・検討し、その系統を探る。その結果、韓国の軒下で用いられている挿肘木は、韓国柱心包独自の表現要素であることが明らかとなった。

## 3. むすび

以上より、韓国寺院建築の柱心包における斗拱表現は、一貫して肘木の形態に集中していることが鮮明に浮かび上がった。これは挿肘木が山彌と同じように統一されてゆく過程でも確認することができる。これは常に肘木を意匠の対象として認識していることを意味する。またなによりも、斗拱の表と裏の表現を用いて建物の空間を区別する論理が見られる。これは表現する手法は異なるものの、日本中世寺院本堂においても同様であった。そしてこの表と裏の論理は、見せかけの論理にも繋がる。韓国では13世紀の浮石寺無量寿殿断面に、日本では12世紀の中世寺院本堂の「見せかけの虹梁鼻」で、斗拱の外部と内部、つまり表と裏の論理を確認することができる。このような、見せかけの斗拱表現は、少なくとも韓国と日本の中世において、それ以前には見られない柱心包斗拱表現の共通した意識である。これを中世の共通する意識という意味で「中世化」という言葉で捉えることも可能ではなかろうか。ただ、見せかけの意識自体は、構造から分離された日本の中世寺院本堂の斗拱では、非常に積極的にその手法を用いる一方、常に構造の中から展開されている韓国寺院建築の柱心包では部分的に見られる。しかしながら、斗拱が構造から離れていようがいまいが、外部表現の手法は、韓国では肘木形態の一点に日本では虹梁鼻の一点に集約される。これは意匠を表わすバリエーションを考える際、広い意味で、両国とも単純で明快な展開をしていると捉えることもできる。

東アジアにおいて、韓国寺院建築の柱心包の斗拱表現は、肘木形態の装飾現象が非常に進んだ特有な展開を有するものであった。